

岡下誠

表紙イラスト / あかさ

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS



黒衣の少女探偵

月読百合奈

つよみゆり

外伝

黒衣の少女は淫虐なメイド修行に啼く

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『黒衣の少女探偵 月読百合奈外伝  
黒衣の少女は淫虐なメイド修行に啼く』  
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『黒衣の少女探偵 月読百合奈』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



黒衣の少女探偵  
月読百合奈 外伝  
つよみ・ゆりな  
黒衣の少女は淫虐なメイド修行に啼く

岡下誠

表紙イラスト／あかざ

## 登場人物紹介

### Characters

---

つくよみゆりな  
**月読百合奈**

名門・月読家の令嬢。ゴスロリ衣装を身に纏い、数々の難事件を解決してきた。長い黒髪と豊満な肉体が印象的。

はぎりなでしこ  
**葉桐撫子**

百合奈の親友。年齢よりも幼い容貌をした少女。

ひいらぎみき  
**柊美姫**

メイド養成学校の理事長。ショートボブで、キャリアウーマンを思わせる理知的な美貌。

真夏の日差しが照りつける中、黒い日傘をさした少女がたたずんでいた。

気品のある美しい顔。腰まで届く髪は夜の闇を切り取ったかのように黒い。美の女神が具現化したかのように肉感的な肢体に、ゴシッククロリータの服をまとっている。

彼女の名は月読百合奈。

常にゴシッククロリータの服を着ており、黒衣の令嬢として知られている。冴えわたる推理と華麗な剣術で、学園で起きた事件を解決してきた。名家の生まれであることも相まって、百合奈の名は、学園内はもとより周辺地域までもとどろいている。

(ここですわね。撫子が囚われているのは……)

百合奈は目の前の屋敷を見上げた。

潇洒な洋風邸宅である。月読家のものほどの規模はないが、一般家庭と比較すれば「屋敷」としか表しようがない。

百合奈がここを訪れたのは、最愛の少女である撫子を救い出すためだ。

ことの発端は三日前に届いた手紙である。

夏休みの期間中、百合奈と撫子は避暑地に行く約束をしていた。月読家が所有する別荘で、二人きりで過ごす予定だったのだ。

しかし撫子の手紙には、謝罪とともに避暑をキャンセルしたい旨が記されていた。見習いメイドとしてとある屋敷に住み込んだため、行けなくなっただけというのだ。

(学校もあるのに、どうしてそんなところに?)

何かの事件に巻き込まれたのでは、との疑惑を抱いた百合奈は、その屋敷に潜入することを決意したのである。

メイドの教育は、個々の屋敷で行われるのが普通だ。先輩メイドが新人を指導するのである。だが、新興の資産家層の中には、メイドへの教育と他家への斡旋をビジネスの一環としてする者もいた。この邸宅の主人もその一人である。

呼び鈴を押す前に、百合奈は眼鏡を取りだしてかけた。月読の令嬢がメイドになろうとするはずがないので、偽名を使うためである。ゴシッククロリータの服を身につけたままでいるのは、黒衣の少女探偵としての誇りゆえだ。

呼び鈴を鳴らすと、同じ年頃のメイドが玄関から出てきた。紺のブラウスとロングスカート。フリルをあしらった白いエプロン。一般的なメイド服だ。

「お待ちしておりました。どうぞ、こちらへ」

屋敷の中では、見習いメイドとおぼしき少女たちが掃除をしている。撫子の姿を探してみたが、ツインテールの幼顔は見あたらなかった。

百合奈が案内されたのは、屋敷の主人の執務室である。気が散るほどは広くなく、窮屈なほどは狭くない。ほどよい広さの部屋には重厚なデスクがあり、スーツを身につけた女性書類に目を通していた。

（この人が……）

百合奈は、眼鏡の奥から女性を睨みつける。

柗美姫。

事前の調査では、二十九歳との報告を受けている。ショートボブの黒髪で、知性が薫る端正な顔をしている。有能なキャリアウーマンといった印象だ。百合奈たちが入ってきたというのに、書類から目を離そうともしない。

自分のペースで書類に目を通し終えてから、ようやく美姫は顔を上げた。

「よくいらしてくれたわ」

女主人の知的な顔には笑みが浮かんでいるが、その瞳は笑っておらず、目の前にいる黒衣の少女を冷やややかな眼差しで値踏みしている。

「私の家で見習いメイドとして働けば、どこのお屋敷に行っても通用するようなメイドになります。ですが、娘なら誰でもよいというわけではありません。それなりの品位や従順さが必要です」

美姫は、計算しつくされたような微笑をたたえていた。

「あなたの従順さを確かめさせてもらうわ」

伶俐な視線が百合奈の表情をうかがっている。百合奈は無言でうなずく。

「服を全て脱ぎなさい。裸になるのよ」

「えっ。今……何とおっしやりました？」

思わず百合奈は聞き返してしまった。

「覚えておきなさい。主人に同じ命令を繰り返させてはいけません。ですが今回は許してあげます。服を全て脱ぎなさい」

（こ、この場で裸になれと……？）

「あなたの気品については、優美な立ち居振る舞いを見れば試すまでもありません。まるで良家の令嬢。あとは従順さを試すだけ……」

この場には女性しかいないが、裸身をさらして見せ物になるなど、良家に生まれた百合奈でなくとも耐えがたいはずかしめである。まして人一倍気高い精神の持ち主である百合奈は、無体な要求に怒りすら覚えた。

（でも、撫子を取り戻すためにも、この屋敷に採用されなければなりませんわ……）

怒りと恥ずかしさが交ぜになって小刻みにふるえる指を、黒衣のボタンにかけた。ゆっくりとはずしてゆく。黒のブラウスとロングスカートを、かたわらにひかえていた見習いメイドに手渡す。

しばらくためらってからブラジャーのホックもはずし、肩紐を腕から引き抜いた。たわわに実った乳房がこぼれ出る。百合奈の乳房は、歩いただけでもたぶんたふんと揺れるほどの量感を誇っていた。両腕で抱えきれないほどだ。乳首を隠すことはできても、乳房の



裾野同士がぶつかりあつてできた谷間がのぞいてしまふ。

恥じらいと怒りに目元を上気させながらも、百合奈は鋭い眼差しで女主人を見すえた。美姫の瞳は、少女が恥辱の面接試験に臨んでいるのを目の当たりにして、嗜虐のぬめりを帯びている。

(撫子のため、撫子のためですわ……)

自らにそう言い聞かせてから美姫に背を向け、下穿きに手をかけた。百合奈が穿いているのは、ドロワーズと呼ばれる古風な下着である。だぼだぼの半ズボンといった形状で、裾が絞られている。

(撫子もこんな目にあつたのかしら……)

恥ずかしさと憤りにさいなまれつつドロワーズを脱ぎ下ろした。片手で乳房をかき抱き、もう片方の手で股間に息づく秘唇をおさえる。身を縮めるようにして秘密の器官を隠しながら美姫の方へと向き直つた。

百合奈が身につけているものといえば、靴と靴下、変装用の眼鏡、そして髪を飾るヘツドドレスのみである。髪飾りと眼鏡を着けただけで、あとは首の下から足首まで白い裸身をさらしているのだ。

「隠してはだめよ。手を下ろして胸とあそこをさらけ出しなさい」

キツとした眼差しでスーツ姿の女主人を睨みつけ、恥じらいの器官からゆっくりと手を

どける。

美の女神から祝福を受けたかのように豊かな乳房は、挑発的なまでにぐんと張り出していた。薄桃色を乳首は尖りかけている。以前に受けた調教の数々により、百合奈の肉体ははずかしめられただけで興奮してしまふようになっていた。

「股間の手もどけなさい」

百合奈の手が覆っているのは、女の身体の中で最も秘められているべき器官。本来ならば何枚もの衣服によってさえぎられているはずの場所である。手のひらで覆い隠していることすら恥ずかしいのに、そこを剥き出しにしろと命じられているのだ。

怒りと羞恥に血をたぎらせながら、それでも手を脇へとずらす。

秘められた女花の園には、濃い下草が茂っていた。陰門は肉厚でぷくらと盛り上がっており、その合わせ目からは紅色の花弁がはみ出ている。

裸に剥かれるという恥辱の面接試験に、心ならずも肉体は高ぶり始めていた。女芯はうずきに見舞われ、包皮の下でむずがっている。幸いにして蜜汁は外にまでもれ出してはいないが、膣穴の内部はしとどに潤んでいた。発情の証があふれ出してしまうのは時間の問題である。

（わ、私としたことが……はずかしめを受けているというのに……）

美姫は舐めるようにして百合奈の裸身を見ている。彼女の視線は冷ややかでないながら粘

ついでおり、蝟の触手を連想させた。

「男好きのする素晴らしい身体ね。羨ましいくらいよ」

裸身を品定めされているかと思うと屈辱感が湧き上がり、その屈辱感のためにはますます肉体は発情してしまふ。眼鏡越しに女主人を睨みつけながらも、百合奈の身体は悶々としたわだかまりが溜まる一方であつた。

「そのまま立っていなさい。少しも動かないようにね」

妖しい微笑とともに美姫は立ち上がる。スーツとタイトミニスカートをまとつた細身の身体は、肉感的な百合奈とは別の魅力を持つていた。

この屋敷の女主人は、メイドを志願してきた少女の背後にまわり込み、官能美にあふれる肢体に腕を絡めた。

「な、何を……」

「面接試験はまだ終わっていないのよ。手は下ろしたままでいなさい」

手が背後から伸びてきて、左右の乳房をすくい上げられる。いやらしい手つきでむにむにと揉み込まれた。

「んんう……ん……ん……」

快感が湧き上がる。

豊かな乳房はふしだらな快樂受容器官となり果て、揉み上げられるたびに歓喜が響きわ

たった。それは下半身にまで伝わり、秘唇は悶々とした牝情にたぎる。

「やわらかくてとてもいい揉み心地ね」

女主人の右手が、じわじわと下腹部を這い下りてきた。まるでじらすかのように。

百合奈は弱火のような羞恥にじつくりとあぶられ、女肉はやわらかくとろけてゆく。百合奈の手は拘束されていないので、秘唇を覆い隠すことも、美姫の手を払いのけることも可能である。

しかしそうしようとはしなかった。ヘッドドレスを着けただけの美少女は、脚をわななかせながらも気をつけの姿勢で裸身をさらしている。

女主人の指は、いよいよ秘唇にまで這い下りてきた。恥辱の面接試験に秘めやかな興奮を覚えてしまい、肉厚の陰門はすでにほころんでいる。合わせ目にそってまさぐり上げられると、腰が溶けてしまったかと錯覚するほどの快楽に見舞われた。

「ああ……」

膣口はひくひくとうごめいて、はしたない体液を滴らせてしまう。

「まあ。こんなにお汁をあふれさせて。お嬢さまといった顔立ちをしているのに、身体は随分と淫乱なのね」

「ち、違いますわ……あんっ」

あさましいまでにくくらんだ女芯へ指の腹をあてがわれ、ぐりぐりとこねまわされる。

女の身体の中で最も感じやすい蕾を執拗に責め立てられ、百合奈は快感に翻弄されてしまった。足腰から力が抜けてしまい、立っていることすらおぼつかない。

ヘッドドレスを着けただけの裸身はふらつき、背中を美姫にあずけてしまう。肉体をゆだねるといふ意思表示でもあるかのように。

「調べるまでもないでしょうけれど、処女検査をしてあげる」

熱く湿ったささやきに耳をくすぐられた。

指先を膣口に突き込まれ、ぬぼぬぼと浅く抜き差しされる。それだけで百合奈はむっちりとした美尻をくねらせてしまい、女陰からはなおのこと果汁を絞り出してしまふ。

（そんな……処女検査だなんて……）

思わず美姫の手首をつかんだが、肉体を快楽にむしばまれているため、その手に力を込めることはできない。

二本の指を一気に突き上げられた。

「あああああつ」

秘められた粘膜を荒々しくこすり上げられ、肉感的な裸身は歓喜の雷に撃たれる。

裸に剥かれるというはずかしめを受け、乳房と女芯を淫撫され、女穴は牝欲の熱い坩堝となっていた。煮えたぎった快楽がうねりとなって噴き上げる。

太腿は細かにふるえた。膣穴はひとりでに収縮し、美姫の指をきゅうきゅうとむさぼり

吸ってしまおう。

「処女どころか、淫婦のあそこね。私の指にねつとりと絡みついてくるわ」

中指と薬指で秘唇を激しく突き上げられる。指腹で容赦なく秘粘膜をこすられた。手荒にかきまわされる。

「ひいいつ、ああつ、あんつ……あひい……」

秘唇を指で犯され、女の喜びをいやというほど味わわされた。女主人に背中をあずけたまま百合奈はよがり悶える。肉体の許容を超えた快楽を与えられ、溜め込んでいた愉悅が弾けた。

「ひああ……んはああああああ……」

ヘッドドレスを着けた黒髪が跳ね躍り、官能美に恵まれた肢体がわななく。高い声を放ちながら百合奈は性の喜びを極めた。黒衣の少女探偵として謳われた令嬢は、淫らな面接試験の果てに気をやってしまったのだ。

甘美な脱力感に満たされた百合奈は、女陰を蜜汁まみれにしながら力無くその場に座り込んでしまった。

百合奈は、ヘッドドレスを着けただけの裸身をさらしたまま、絶頂の余韻にひたつて座り込んでいた。変装用の眼鏡をかけた目元は、ほんのりと上気している。

その姿を、この屋敷の女主人が冷笑とともに見下ろしていた。

「合格よ。見習いメイドとして雇ってあげるわ。いずれ、しかるべき家に斡旋してあげましょう」

「あ、ありがとうございます……」

令嬢は乳房をかき抱き、股間をおさえ、恥じらいにうつむく。名門に生まれた百合奈にとつて、メイドになるなどというのは、それだけで屈辱である。まして試験と称して裸に剥かれ、あまつさえ気をやらされてしまったのだ。

（撫子を救い出すためですわ……）

淫らなはずかしめを受けながらも、黒衣の令嬢が心に抱いた決意は揺らがない。

「メイド服は当家で用意するわ。裸をさらしてからメイド服に着替えることは、メイドとして主人にお仕えるための儀式でもあるの」

美姫は、見習いメイドの少女に命じて、メイド服一式を持ってこさせる。

「あなた、ゴシッククロリータが好きなようね。だったらこれを着なさい」

百合奈のために用意されたのはゴシッククロリータ風のメイド衣装である。黒基調のブラウスとロングスカートで、純白のフリルが襟元や袖口、裾などにあしらわれていた。普段の百合奈が身につけている服装との大きな違いは、装飾用コルセットの代わりにショーツエプロンがあることだ。

慇懃で妖美な微笑をたたえつつ美姫は男たちに謝罪し、黒衣のメイド美少女に革手錠をかける。

革手錠で拘束されても百合奈は身をよじらせ続けていたが、もはや抵抗としての効果はなく、男たちの欲情を煽るだけだった。

「ふふふ。こうなつては黒衣の令嬢も輪姦の宴に捧げられた小娘ね。気分はいかがかしら、月読のお嬢さま」

その名で呼びかけられ、百合奈は血の気が引くのを感じた。

「なぜ……それを……。変装もしたし、身分証明書も偽造しましたのに……」

「簡単なことだわ。撫子を見習いメイドに墮としたのは、百合奈さんをおびき寄せるためですもの」

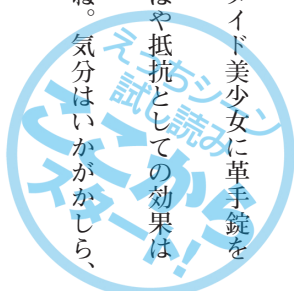
「何ですって？」

「月読家の令嬢として、また黒衣の令嬢として名高い百合奈さんをメイドとして仕込めば、私の名前はこれ以上ないほどに高まるわ」

女主人の手で頬を撫でられ、変装用の眼鏡をはずされた。

「あなたは警備が厳しいから、撫子を餌にしたの。ものの見事に食いついてくれたわね」湧き上がる怒りを瞳に込め、百合奈はこの館の女主人を睨みつける。

「百合奈ちゃんっ、百合奈ちゃんっ」





心配そうな声で叫ぶ撫子を、男たちは再び四つん這いにさせた。小ぶりの尻をつかみ、いきり立ったペニスを突き入れる。

「ひいっ。い、いやですう。百合奈ちゃんの前では……百合奈ちゃんに見られるのはああ……あひっ、あん……んあああ……」

あらがいの声は、ほどなくして、舌足らずな嬌声へと変貌してゆく。男を喜ばせずにはおかない悶え啼きである。

「な、撫子……」

最愛の少女が肛門陵辱されているというのに、百合奈はこうして見ていることしかできない。

「あの娘、あんな幼顔をしているのに、身体は開発されつくしていたわよ。あそこもお尻までも。百合奈さんがやったのかしら？ それとも、百合奈さんと一緒に、他の誰かから調教されたの？」

屈辱の思い出がよみがえる。おぞましいことこの上ないあの日々だが、思い出すとなぜか肉体がうずき出してしまふのだ。

「あの娘のお尻は絶品よ。だから貞操帯を穿かせたの。張形を内側に生やした」

百合奈も似たようなものを穿かされたことがある。どんなに秘唇がうずいても自分では慰めることができないのだ。

「性欲がわだかまっても、あそこでは解消できないでしょ。その代わりに、お尻がどんどん感じやすくなってゆく。今では、指先で入り口を軽くこすってあげただけで、おしっこをもらしながら気をやるまでになったわ」

「私の撫子をそのようにはずかしめたこと、後で後悔させて差し上げますわ」

「ご立腹のようね。私としては感謝してほしいくらいなだけけれど。あの貞操帯のおかげで、少なくとも女性器は男根から守られているのだから」

美姫は意味ありげな含み笑いをする。

「でも……。お客さま方は、撫子のあそこも品定めしてみたいご様子。どうしようかしら」  
 女主人がちらつかせている鍵は、貞操帯のものに違いない。それが男たちの手に渡れば、撫子の封印は解かれ、秘唇は男性器によつてはずかしめられてしまうであろう。

（撫子を助けるためには私が生け贄になれば……。で、でもそのようなこと……）  
 美姫は、鍵を男たちに手渡すような素振りをする。

「お、お待ちなさ……。いいえ……。お待ちください……」

愛する少女のため、黒衣の令嬢は自ら恥辱にまみれる決意をした。

「わ、私の……。あ、あそこを……。使っても……。よ、よろしくてよ……」

恥じらいに悶え、紅に染まった美貌をうつむかせながら、ささやくように小さな声で言った。

「この期におよんで、まだ気位の高さが抜けきっていないようね」

ビジネススーツを身にまとった女主人は手元のスイッチを操作した。

「んはあああ……んんん……んくう……ひいいい……」

しばらくは止まっていた淫器具が、膣の中でいきなり激しく震動し始めたのだ。うずいていた秘粘膜は歓喜のよだれを滴らせ、快楽をむさぼってしまう。

黒いロングスカートの内側で太腿同士をよじり合わせて、とめどなく湧き上がってくる快感をこらえようとした。じつとしていられず、むっちりとした尻肉がうねり舞ってしまう。

「あなたはメイドなのだから、もっと丁寧な言葉づかいでお願いをなさい」

男根を模した淫器具がもたらす震動は、官能をかき立てるような荒々しいものから、一転してじらすような微弱なものへと変わった。

「あああ……ど、どうか……百合奈のあそこを……品定めなさってください……」

「もっとお尻を持ち上げて、殿方を誘惑するのよ」

ロングスカートを腰の上までまくり上げられ、レースリボンの股縄を引っ張り上げられる。

「んひいいいっ」

精緻で優美なレースリボンは女肉の合わせ目へますますきつく喰い込み、感じやすい蕾に快感刺激を与えた。とともに、淫器具はより深くまで押し込まれ、子宮の入り口へ直に

震動を味わわされる。

「んはあ……く、ください……。みなさまのおチ○ポ……。私のあそこをお試してください……」

もはや、撫子を陵辱から救うためなのか、自らの欲望のためなのか、自分でも定かでない。「そんなに言うのなら試してやろう」

男の一人が百合奈の尻肉をつかんだ。レースリボンを解き、膣穴をふさいでいた淫筒を引き抜く。蜜にまみれてどろどろになった女陰に亀頭をあてがい、肉の合わせ目をこすり上げる。

「あああ……じ、じらさないください……。おチ○ポ……。欲しいんですの……」

後ろ手に拘束された状態で、うつぶせの姿勢から尻肉だけを高く持ち上げていた。少しでも男の気を引こうと尻をくねらせる。責め具を抜かれて秘唇は欲求不満に喘いでおり、亀頭にこすられるたびに姦通を期待してひくひくとうごめいていた。

牝欲の坩堝となった女穴から、熱い蜜汁がとろりとこぼれ滴る。

黒衣の令嬢が、身を灼く快樂に屈してゴシツクロリータの美肉メイドに成り下がった瞬間だ。

「くくく……。淫乱お嬢さまメイドのあそこはどんな具合かな」  
いきり立った男性器をずぶずぶと埋め込まれる。

「あああ……あつ……ひいいいいつ」

高い声を放ちながら百合奈は背を反り返らせた。艶やかな黒髪を振り乱す。

生身の逞しいものを待ちわびていた女穴は、力強く押し広げられて喜びにむせび啼いた。熱く固い肉塊に吸いつき、むしゃぶつて、男をむさぼりつくす。歡喜の涙は濃厚な蜜酒となつて男をもてなした。

「なかなかの味わいじゃないか」

手のひらいっぱい尻肉をつかまれ、牡の荒つぽさに満ちた腰づかいで男性器を打ち込まれる。女肉穴をえぐられ、かきまわされ、快感が身体の芯にまで響く。

「あひいつ、あんつ、あんつ、んはああ……」

もはや唇を結ぶこともできず、半開きになった唇からは、打ち込みのリズムに合わせて切なげなよがり声を放つてしまう。

令嬢の気品ある美貌は快樂に上気し、長い睫毛に飾られた瞳は潤んでいる。しどけなくゆるんだ唇からは、途切れることなく歡喜の喘ぎをもらしていた。

そこにペニスが突きつけられる。

「口唇奉仕の技量を見させてもらおうか」

先汁にぬらついた亀頭からは濃密で生臭い匂いが立ち上り、鼻孔をふさがれた。思わず顔をしかめて脇を向く。

「いやなら結構だ。あつちの娘にしゃぶってもらうからな」

「お、お待ちください……。いたしますわ……。いいえ、しゃぶらせてください……」

そびえ立つ男性器を上目づかいで見上げ、根本から縫い目まで舐め上げた。龟头を唇に含み、じゆるじゆると唾液音をさせながら舐めしゃぶる。

男性器の腐臭が口内からも鼻に抜け、頭がくらくらとした。身体の中にまで男性器の匂いが染みついてしまったかのようなのである。

「どうだ？ おいしいか？」

「んはあ……。んん……。おいしい……。おもしろうございますわ……」

ペニスに唇を捧げるといふ屈辱行為を強いられながらも、なお男におもねる言葉を吐かなければならない。それでも、『おいしい』と言っているうちに、本当に男性器がおいしく思えてきてしまう。しゃぶるほどに興奮が呼び起こされ、肉体がうずいた。

「んっ……。んんうう……。ん……。んん……」

男性器をしゃぶっている間も、下半身からはとめどなく快楽が流れ込んでくる。

ずにゅっ、ぬりゅ、ぬずず……。

黒いロングスカートをまくり上げられ、剥き出しになった尻肉。そのむっちりとした桃果実と男の下腹部とがぶつかり合い、ぱんぱんという肉交の音を響かせている。

(あああ……。あんっ、ひいっ。い、いいですわあ……)

遅いもので膣穴を押し広げられ、激しい抜き差しでこすり上げられているのだ。

一日中、淫器具でじらされてきた秘唇は、生身の男性器に犯されて、ふしだらにもよがり悶えていた。陵辱されているとはいえ、百合奈の肉体は女の喜びを享受してしまう。

「うおおおっ」

雄叫びとともに男たちはラストスパートに突入した。

唇と女陰。前後から、ひとときわ激しい打ち込みを見舞われる。

口内で、膣奥で、男性器は荒々しい脈動を始め、熱く煮えたぎった精液を勢いよくほとばしらせる。

びゅぶつ、ぼびゅびゅ、ぶびゅゆゆ……。

ぶびゅつ……ぶびゆる……ばびゅびゅつ。

射精の喜びに突き動かされた腰づかいはことのほかに荒々しく、牡を体現しているかのようだ。

口ではもう舌を使う余地もなく、ただ唇を開いて、牡欲の捌け口として捧げている。よだれを垂らし、くぐもった呻きをもらしながら、太い肉柱を口で従順に受け止めた。

雄々しい突き込みで唇と膣穴を犯され、黒衣の令嬢も歓喜の果てへと追いやられる。

「んん……んううう……んううううう……」

太い肉のさるぐつつわを囁まされたまま、鼻にかかった歓喜の呻きを長く響かせた。

身体中が性の喜びをむさぼるための性感帯となり、肉体の全てが女性器になってしまったかのようだ。

射精しつつもなお抜き差しを止めないペニスに、どこまでも快楽をかき立てられる。唇に注ぎ込まれた精液は最高級の乳液となり、うっとりとした表情で亀頭を舐めしゃぶる。

「ああああ……」

ようやくペニスを引き抜かれた時、百合奈は、撫子の前で気をやらされてしまったことを恥じる余裕もなく、快感に溺れていた。

尻肉はあらわになり、股間からは蜜汁と精液との混合液が逆流していた。半開きになった唇からはよだれに混じって精液が垂れ落ちている。

ゴシッククロリータのメイド服をまとった美少女が、陵辱の果てに歓喜を極めた姿。

それに煽られた男たちは、品定めを続けるべく、朦朧とした意識の令嬢に亀頭を押し当てた。

「本日は、当家のメイド競売会にお集まりくださり、まことにありがとうございます」

この屋敷の女主人・柊美姫は、慇懃な口調で紳士たちに挨拶した。

ショートボブで知性の薫る美貌には、妖しくも美しい笑みが浮かんでいる。スレンダーな身体にまもっているのは黒のビジネススーツ。タイトミニスカートはいつもよりもさら



に丈が短く、太腿はほとんどがあらわになっている。

男たちの視線が太腿に集まるのを心地よく感じながら、美姫は客たちにほほえみかけた。ここは二階の奥まった一室である。

一人がけの黒い革張り椅子が七脚、半円形に並んでいた。その向かいには、男性器を模した黒い柱が立てられている。

美肉メイドの競売会に集まった紳士たちは七人。みな高級なスーツを着込んでおり、顔には仮面を着けている。仮面にうがたれた眼の穴からは、淫らな競売会を前にして、欲望にぎらついた視線が放たれていた。黒革張りの椅子にかけた男たちの股間は一様に膨張している。ズボンの布地は内側から突き上げられていた。

「今回の競りにかけられるのは二人です。まずはこの娘から……」

介添え役の見習いメイドの少女が鎖を引きながら現れる。鎖は首輪につながっており、その黒革の首輪は童顔少女の首に喰い込んでいた。

ツインテールを揺らしながら引き立てられてきたのは葉桐撫子である。

彼女が身につけているのは、黒を基調にしたゴシックロリータ風のメイド服。

スカート丈は太腿の半ばまでしかなく、黒のパニエによってふんわりと広がっている。オーバーニーソックスを穿いており、フレアミニの裾からのぞく太腿を際立たせていた。エプロンや袖口、スカートの裾には大きめのフリルがふんだんにあしらわれていて、撫子

の■さを強調している。

(私……この人たちに買われちゃうんだ……)

撫子は、幼顔をうつむかせながらも、つぶらな瞳で仮面の紳士たちをちらちらと盗み見た。

「この娘は……」

女主人の手で顎を持ち上げられ、可愛らしい童顔を男たちの方へと向けさせられる。

「ご覧の通りの幼顔をしておりますが、肉体の感度はすっかり大人の女です。特に、お尻の穴の収縮は素晴らしく、ご満足いただけると存じます」

自分の身体を、特にお尻の穴の締めりをあからさまに品評されて、撫子は幼顔を赤らめた。恥ずかしくて仕方がないのだが、なぜか肉体はうずいてしまう。

「実際にご覧いただきましょう」

ペニスをかたどった黒い柱に、腕をまわすように命じられる。柱を抱いた状態で、手首に革手錠をかけられた。

「ああ……」

巨大な男性器に抱きついたような格好で撫子は拘束される。尻を男たちの方に向けて。フレアミニのスカートをまくり上げられた。

「ひっ……」

ぶりっとした小ぶりの尻があらわになる。

撫子が穿いている下着は普通のものではない。扇情的な下着……ということではなく、そもそも布製ですらない。股間を覆う逆三角形の股当ては金属製。上の二つの角から伸びた鎖は腰を締めつけ、下の角から伸びた鎖は太腿の間をくぐって尻肉の谷間に喰い込んでいる。

金属製の下着。貞操帯である。

「貞操帯を穿かせて女性器を封印した結果、性欲を解消するために、お尻の穴がクリトリスに劣らないほど感じやすくなりました」

尻肉に喰い込んだ縦鎖を引っ張り上げられた。

「んひいっ」

細かな鎖で尻穴のすぼまりをこすられ、快感が湧き上がった。尻の谷間に息づく小さな器官は、喜びのあまり、きゆうきゆうと収縮する。

貞操帯の内側では、封印された秘唇が煮えたぎる淫情に悶えている。お尻の穴で性欲を解消しているとはいえ、本来の性器官である秘唇は、わだかまりに悩まされ続けてきた。膣穴をひくんひくんと蠢かせ、おねだりの蜜汁を滴らせている。

「あそこもご覧ください」

貞操帯がはずされた。

約一週間ぶりに外気をあびた秘唇は、それだけで喜びと期待にうずき返る。

股間から立ち上る濃厚な匂いに、撫子は顔を赤らめる。おしっこの残滓と愛液とが入り混じり、体温によって蒸らされ続け、ふしだらな牝の匂いとなっていた。

(あああ……)

ゴシツクロリータ風のメイド衣装は何ひとつとして脱がされていない。

しかし、スカートをまくり上げられ、貞操帯まで取り去られ、女の子にとって恥ずかしい器官だけが、これ見よがしに剥き出しになっているのだ。

「撫子、もっと、お尻をお客さまの方に突き出しなさい」

スーツ姿の女主人は、手にしていた黒い乗馬鞭で撫子の尻を軽く撫でた。

「ひいっ」

お尻の肌には鞭先の固さを感じ、ツインテールの童顔少女はあわてて、腰をさらに後ろへと差し出した。男性器の柱に抱きついたまま、できるだけ尻肉を男たちの方へ突き出す。

その結果、すももを思わせる小ぶりの尻の下に、幼げな女性器が垣間見えてしまう。

ぷつくらとした肉饅頭には、ひとすじの産毛すら生えていない。縦に刻まれた溝からは、恥ずかしそうに花びらがのぞいている。

(いや……いや……。あそこもお尻も……)

秘められた二つの器官に男たちの視線をあび、撫子は恥じらいに悶えた。だが、恥ずかしいという想いがつのればつのるほど、肉体は高ぶり、あそこもお尻も乳首も、むずむず

としたうずきに襲われる。

「このように童女のような姿をしたあそこですが……」

鞭先で割れ目をなぞられた。

「ひんっ」

幼顔の美少女メイドは舌足らずな嬌声を上げてしまう。

ずっと刺激を与えられてこなかった秘唇は、極限まで鋭敏になっていた。一週間ぶりの刺激は巨大な快楽となり、撫子の幼児体型に響きわたる。膣穴は小刻みに収縮して、男たちの前だというのに喜びの涎を滴らせた。

「この娘の感度はお分かりいただけましたかと存じます。それでは、競売を開始いたします」  
見習いメイドが銀の盆を持って現れる。銀盆に乗せられているのはイチジク型の浣腸。十二個もある。

「みなさまには、浣腸の権利を競り合っていたいただきます。撫子に浣腸をほどこしていただきます。おもらしをさせた方が落札者となります」

女主人は、撫子の秘唇を鞭先でつつきながら言った。

「もし、この娘が全ての浣腸をされても、おもらししなかったら、今回の競売は不成立となります。ご了承ください」

競売が始まった。

最初の五個までは、あっさりと落札者が決まり、少女の尻穴に浣腸液を注いでゆく。

撫子は、競売の不成立に一縷の望みを見いだし、必死になって肛門を締めつけるのだった。しかし……。六個目から様子が変わってくる。

「ほう、なかなか頑張っているじゃないか」

浣腸器の先端で、尻穴のすぼまりをつつかれた。

「んひいいいっ」

ペニスをかたどった柱に抱きつきながら撫子は身をわななかせる。

お尻の谷間に息づく敏感な器官をいたずらされて、むずむずというくすぐったさが快感となって押し寄せてきた。小さなすぼまりは快楽に悶え、ひくひくと細かな蠕動を繰り返す。

お尻の快感が女の器官にも響いて、欲求不満に悶々としていた秘唇は、はしたないまでに蜜をもらして愛撫をねだっていた。

（お尻……気持ちいいですうう……）

ツインテールの少女は、幼顔に恍惚の表情を浮かべる。排泄欲求が切迫している中、お尻の快感に翻弄され始めていた。ともすると快感のあまりに、お尻の締めつけがゆるんでしまいそうになる。

「ほらほら、どうした。おもらししちゃうぞ」

男は一向に浣腸をしてくれない。管の先で尻穴をくすぐるばかりだ。

「ひうう……あ……ひい……ん……」

いたずらされるたびに撫子は、可愛らしい声で悶え啼きを披露してしまう。このままで、排泄欲と快楽が弾けるのを待つほかない。

「ど、どうか……。く、ください……」

「ん？ 何をだ？」

「お浣腸を……。撫子のお尻に……。お浣腸をください……」

ペニスをかたどった柱に抱きつきながら、撫子は屈辱的なおねだりをした。小ぶりな尻肉をなおのこと後ろに突き出して、態度でも浣腸を懇願する。

「そうか。そんなに浣腸が欲しいのか」

小さな菊蕾に管を突き立てられた。

ずちゆるる……。

乳白色の薬液を注ぎ込まれる。

「んひいひいっ！」

白い液が快感とともに逆流してくる。排泄欲求は一気に高まり、撫子はあわてて肛門に力を込めた。

（やっど半分……）

男たちによる肛門嬲りは、回を重ねるごとにますます執拗になってゆく。

管を尻穴に突き入れて抜き差ししたり、挿入したままかきまわしたり。

「あひいいつ、ひいつ、あああああつ」

そのたびに排泄欲と快感をかき立てられ、ツインテールの童顔少女はよがり啼きの果てに浣腸をおねだりする。

「ひやうううつ。い、いじわるしないでください…。ど、どうか…。撫子のお尻に…お浣腸をください…。んひいいつ…。」

いたずらされるたびに、小ぶりな尻がくねってしまふ。發育途上の尻ではあるが、うっすらと柔肉をまとっており、女らしい丸みを帯びつつあった。

いたいけな中にも女の色香が漂う尻肉に、男たちは淫らな視線を這わせる。

ゴシッククロリータの黒いメイド服を着てはいても、股間の割れ目もお尻のすぼまりも、女の子として秘めておきたい所は全てあらわになっていた。しかも、幼げな無毛の女唇は蜜に濡れ、肛門は排泄欲に悶えてひくついている。

淫らな有様になっていゝ下半身を意識するたびに恥じらいに灼かれ、尻をゆするたびに排泄欲が波立つ。

八個目、九個目を注入される頃には、下腹部が、かすかなふくらみを見せるようになっていた。時間の経過とともに排泄欲は高まり、それに追い打ちをかけるように十個目、十一個目の浣腸がなされる。



撫子の幼顔は脂汗にまみれていた。男根を模した柱に、ひしつ、と抱きつき、懸命になつて汚辱が噴き出すのをこらえている。

全ての神経がお尻の穴に集中していた。

(あとひとつ……これが最後……)

十二個目の権利を競り落とした男は、ニヤニヤと笑みを浮かべながら、浣腸器の先で肛門のしわ一本一本をなぞる。

「ひゃうつ、ひつ、ひいっ」

くすぐったさと快感に、お尻が跳ね上がる。くねり舞う。念入りに性感開発された尻穴は、排泄の我慢という要素が加わつて、撫子自身も経験がないほどに感じやすくなつていた。

わずかないたずらでも、下肢がとろけるような快感と、身をよじりたくなるようなむずがゆさに襲われる。

「くくく……。そんなにお尻をゆすられると、狙いが定まらないな」

浣腸器の管先でクリトリスをつつかれた。

「んひいっ、そ、そこは……あひんっ……」

包皮から顔を出して剥き身になつていた陰核を直に刺激され、快感がきらめきとなつて弾ける。貞操帯の奥に封じられてきた女性器は慢性的に発情しており、特に女芯は、どんな些細な刺激でも取り込もうとして身をふくらませていた。管の先で軽くつつかれただけ

なのに、腰全体がしびれるほどの愉悅を味わわされる。

「気持ちよくてお尻がくねってしまるのは分かるけれど、お流腸が欲しいのなら、お尻を突き出したまま、じつとしていなさい」

女主人の左手が股間にあてがわれ、下腹部をぐいっと持ち上げられた。

「もつと念入りに固定してあげるわ」

左手中指を女肉穴に突き入れられる。

「あひいいいいいっ」

歓喜がうねりとなつて噴き上がる。

貞操帯の裏側で煮えたぎり続けてきた蜜壺にとつて、女の指といえども極太の男性器にも劣らない存在感があつた。脚がふるふるとわななく。

禁欲を強いられてきた女肉穴は、久しぶりの固いものを迎え入れて、貪欲に収縮した。撫子の幼顔には似合わないほどの淫靡な喰い締めである。たっぷりの牝汁をあふれさせながら、ちゆくちゆくと吸いしゃぶつた。

撫子の腰は、女主人の左手中指によって固定されてしまう。

「おお、これなら狙い通りに挿してあげられるな」

流腸器の管を尻穴に打ち込まれ、小刻みに抜き差しされる。

「はうう、あんっ……ひい……んっ……」

排泄欲をこらえるために限界まで締めつけているため、浣腸器の細い管でさえ、いきり立った男根のような太さを感じられた。打ち込まれるたびに快楽がかなでられる。

尻穴の収縮と連動して、ひとりでに膣肉もきゅんきゅんと搾り込んでしまう。打ち込まれた指を膣粘膜いっぱい感じてしまい、快感を味わわれた。

排泄欲求をこらえて肛門を締めれば締めるほど、尻穴と秘唇を愉悦に灼かれる。快感に溺れかければ肛門の締めつけがゆるんでしまう。

撫子は快感と汚辱のループにとらわれていた。

(んはあ……お尻……気持ちよすぎてえ……)

浣腸器の管も、女主人の指も、男性器かと錯覚するほどの圧倒的な存在感がある。女陰にペニスを打ち込まれたまま尻を犯されているかのようなのだ。

菊穴のすばまりからは、とろりと白濁の汁がもれ滴った。わずかながらにもれ出てしまった浣腸液は、快感の証である牝蜜を思わせる。撫子はお尻の快感に蜜をもらったのだ。

快楽も排泄欲も限界水位に達していた。

「お、お願いですから……はやく……撫子のお尻に……お浣腸……くださいいっ……」  
浣腸器の抜き差しが早く、激しくなる。

「ひっ、ひいっ、あっ、あひっ……」

女主人の指も蠢きを始めた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**